ほどかれ、縫い合わせる生

―現代中国の産後ケア施設における「宝―媽」の生成―

范　玉リン

キーワード：坐月子、産後ケアセンター、身体経験、切断と接続、ケアの商品化

要旨

本論文の目的は、現代中国の産後ケアセンターにおける「坐月子（ズオユエズ）」の実践に着目し、産後の女性と新生児が、個々の身体を超えた「宝―媽（バオ・マー）」というユニットとして、いかに構築されていくのかを考察することである。

本論文は六章から構成される。

第一章では、研究背景と先行研究を整理した上で、本論文の問いと理論的枠組みを提示した。従来の「坐月子」研究では、産後の女性を「母親になっていく主体」として捉え、アイデンティティの変容や伝統と近代の葛藤といった観念的次元に焦点が当てられてきた。また、こうした先行研究は、母親と新生児を分離された二つの個体として前提としてきた。本論文は、こうした個体論的視座の限界を指摘し、「坐月子」の期間において母親と新生児の身体は母乳や授乳行為などを通じて物質的に結びついていることから、分析単位を「個体としての身体」から「母子という連結体」へと転換することを試みた。具体的には、マリリン・ストラザーンの「部分的つながり」、アネマリー・モルの「多としての身体」、そして情動論的アプローチを理論的枠組みとして位置づけた。

第二章では、調査の概要を述べた。中国陝西省西安市の産後ケアセンターにおける２回のフィールドワークを通じて、施設内における具体的な実践を記述・分析した。また、本稿で使用する「宝媽」「宝爸」などの呼称についても整理した。

第三章では、施設における実践によって「宝―媽」が三つのバージョンとして同時に成立していることを明らかにした。第一は「管理される身体」であり、母乳の計量や移動の規制、可視性の装置を通じて、データを媒介とした透明で計量可能な存在として生成される。第二は「演出されるイメージ」であり、高級感や専門性の演出を通じて、展示と消費を前提とした可視化されたイメージとして構築される。第三は「生々しい肉体」であり、数値管理や演出によって通常は覆い隠されているが、例外的な瞬間に露呈する、痛みや不調を抱えた身体である。

第四章では、これら三つのバージョンが、同一施設内において時に衝突しながらも、調整と分配を通じていかに共存しているのかを分析した。「泣く自由がない」という現象を通じて、管理・演出・生々しい肉体の間の緊張関係を記述した。

第五章では、「宝―媽」というユニットの生成が、他のつながりからの戦略的な「切断」

を伴うことを論じた。空間配置や情報の制限によって、父親や祖母といった家族が「宝一媽」の外部へと周辺化されていく過程を、筆者自身の施設内での「彷徨」の経験を含めて記述した。

第六章では、考察と結論を提示した。本研究の理論的意義は、モルの「多としての身体」という視角を発展させた点にある。モルの議論において、身体の多重性は単一の個体の内部で生じるものとして論じられていた。これに対し、本研究は「二つの身体が一体化して一つの連結体となり、その連結体が複数のバージョンとして実行される」という新たな視点を提示した。これは、「多としての身体」という概念を、個体の内部から身体間の関係性の次元へと拡張する試みである。